

バレンボイム、ベルリン国立歌劇場音楽監督の実力を発揮！

曲目解説

日本ヨハン・シュトラウス協会

若宮 由美

71歳を迎えるバレンボイムは、2009年以来2度目の登場。1992年からベルリン国立歌劇場、2012年からミラノ・スカラ座の音楽監督を務める実力が評価されての再登板となりました。

2014年はリヒャルト・シュトラウス（1864-1949）の生誕150年。彼の曲はバレエ付きで演奏されます。バレエの舞台は、ウィーン9区にあるリヒテンシュタイン宮殿。振付は、アシュリー・ページ（元スコティッシュ・バレエ芸術監督）が担当します。

第一部

エドゥアルト・シュトラウス：〈オペレッタ《美しきエレーヌ》によるカドリユ〉 op.14
Eduard Strauss: *Helenen-Quadrille über Motiv der Oper "Die schöne Helena"*.
op.14

1864年12月、ウィーンからパリに帰ったオッフエンバックはヴァリエテ座で3幕物のオペラ・ブフ（オペレッタ）《美しきエレーヌ》を初演します。ウィーンでは翌年3月17日にマリー・ガイスティンガーの主演で独語上演され、大成功を収めました。そこからモティーフを借用したカドリユは、65年4月2日にフォルクスガルテンで初演。カドリユは6曲の小曲を連ねた構成をとります。2010年のニューイヤーでも演奏されました。

ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ〈平和の棕櫚〉 op.207

Josef Strauss: *Friedenspalmen. Walzer*, op.207

シュトラウス一家の楽曲は、題名が作品の背景を示唆しています。1866年夏、オーストリアはプロイセンに大敗を喫します。暗い世相を振り払うように、ヨーゼフは〈平和の棕櫚〉と題するワルツを書きました。この曲は、66年11月18日にフォルクスガルテンで初演。初版譜の表紙には、棕櫚の枝を手を持ち、遠くを眺める天使が描かれています。

ヨハン・シュトラウス1世：〈カロリーネ・ギャロップ〉 op.21a

Johann Strauss Vater: *Carolinen-Galopp*, op.21a

1810年に歩行者専用の市門が開設され、27年に皇后カロリーネ・アルグステ（フランツ1世の4人目の妃）に因んで、「カロリーネ門」と命名されました。そこからウィーン河に架かる「カロリーネ橋」を渡ると、ヨハン1世の定舞台である「2羽の小鳩亭」にたどりつきます。同曲は27年11月6日に初演され、皇后に献呈されています。

ヨハン・シュトラウス2世：〈エジプト行進曲〉 op.335

Johann Strauss Sohn: *Egyptischer Marsch*, op.335

1869年夏、恒例のパヴロフスク（ロシア）に赴いた2世は、弟ヨーゼフと交替で駅舎コンサートを指揮しました。同曲はここで7月6日に初演。ところが、初演時の題名は「チェルケス行進曲」（「チェルケス」はコーカサスの少数民族）。ウィーンでも同じ題名で出版準備が進められましたが、11月16日のスエズ運河開通に因んで改題されました。初版譜の表紙には、ピラミッドとエジプト総督イスマイル・パシャのパレードが描かれています。

ヨハン・シュトラウス2世：ワルツ〈もろびと手を取り〉 op.443

Johann Strauss Sohn: *Seid Umschlungen Millionen. Walzer*, op.443

ヨハンとブラームスは長年の友人。しかし、ブラームスに曲を献呈する計画は、なかなか実現しませんでした。ようやく作曲を始めた頃、この曲を効果的に発表する別のチャンスを得ます。それは1892年の「国際音楽演劇博覧会」。結果的に、同曲はブラームスと博覧会に二重献呈されました。題名は、シラーの有名な詩（ベートーヴェンの第9交響曲にも使用）に由来。題名を振って「さあ、数千万をむさぼろう！」と揶揄されたといひます。

ヨハン・シュトラウス2世：ポルカ・シュネル〈恋と踊りに夢中〉op.393

Johann Strauss Sohn: *Stürmisch in Lieb und Tanz, Polka schnell, op.393*

この曲には、2世の7作目のオペレッタ《女王のレースのハンカチーフ》(1880)の旋律が使われています。1881年2月22日、作家とジャーナリストによる「コンコルディア協会」の、格調高い舞踏会で初演されました。題名は指揮をした弟エドゥアルトの命名です。

第二部

ヨハン・シュトラウス2世：オペレッタ《くるまば草》序曲

Johann Strauss Sohn: *Ouverture zur Operette "Waldmeister"*

《くるまば草》は、2世による15作目のオペレッタ。1895年12月にアン・デア・ウィーン劇場で初演されました。ハーブの一種である「くるまば草」(＝ほれ薬)が重要なアイテムです。「くるまば草」は、本来、白い花を咲かせるそうです。しかし、新種の黒い花が…。

ヨハン・シュトラウス2世：ギャロップ〈ことこと回れ〉op.466

Johann Strauss Sohn: *Klipp-Klapp, Galopp, op.466*

《くるまば草》の旋律を使用した楽曲。原題の「クリップ - クラップ」は水車が粉を挽く擬音語。主旋律は「少年時代に5分で作曲し、弟ヨーゼフに歌わせた」と、2世自身が証言しています。1896年2月にゾフィーエン・ザールでの「コンコルディア舞踏会」で初演。

ヨハン・シュトラウス2世：ワルツ〈ウィーンの森の物語〉op.325

Johann Strauss Sohn: *Geschichten aus dem Wienerwald, Walzer, op.325*

1868年6月19日に初演されたレントラー風の演奏会用ワルツ。19世紀には、街中の喧騒を逃れ、ウィーンの森に散策にでかけるのが、ウィーン子の楽しみでした。民族楽器のツイターに序奏とコーダでソロを受け持たせ、オーストリアの原風景を描写しています。しかし、2世は根っからの都会人であり、田舎や自然が大嫌いでした。

ヨーゼフ・ヘルメスベルガー2世：ポルカ・フランセーズ〈大好きな人〉op.1

Josef Hellmesberger: *Vielliebchen. Polka francaise, op.1*

ヘルメスベルガーの最初の出版作品。“Vielliebchen”という風習があります。「会食時にスモモから2つ核がでてきたら、その場の異性にひとつを渡す。その後に初めて会った時、『こんにちは、Vielliebchen!』と先にいえば、贈り物をもらえる」というもの。ヨーゼフ・シュトラウスに同名の曲op.7があり、ヴァーグナーもマティルデ・ヴェーゼンドンクの妹のために“Züricher Vielliebchen-Walzer”を作曲しています。「できるだけ愉快地に」という演奏指示からみて、“Vielliebchen”は「親密な恋人」というニュアンスではなく、一般的な親愛の情を示す表現と思われる。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈花束〉op.188

Josef Strauss: *Bouquet. Polka schnell, op.188*

いまからちょうど150年前、1864年12月24日にリング通りを挟んで市立公園の向かい側、つまりはコーブルク宮殿の前に、アウグスト・ウェーバー設計による造園協会の建物が落成しました。2日後の開場式で、ヨーゼフはこのポルカ・シュネルを捧げています。その後、同協会の「花のホール」では数々の舞踏会が開かれました。

リヒャルト・シュトラウス：オペラ《カプリッチョ》から間奏曲〈月光の音楽〉

Richard Strauss: *Mondscheinmusik. Interlude aus der Oper “Capriccio”*

《カプリッチョ》はリヒャルト・シュトラウスによる最後のオペラ（1幕、台本は作曲者とクレメンス・クラウス）。1942年10月28日にバイエルン国立歌劇場で初演されました。きわめて甘美な（月光の音楽）は、最終場の直前に演奏されます。1949年、84歳のリヒャルト・シュトラウスが最後に指揮したのが、この間奏曲でした。

ヨーゼフ・ランナー：ワルツ〈ロマンティックな人びと〉 op.167

Josef Lanner: *Die Romantiker. Walzer, op.167*

〈シェーンブルンの人びと〉に並ぶ、ランナーの有名ワルツ。1840年8月23日にデーブルリングの「カジノ・ツェーガーニッツ」で初演。そのシーズンに評判を取り、自身が前年から音楽監督を務める「金梨亭」や、バーデンの「アリーナ」でも演奏されました。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・マズルカ〈からかい〉 op.262

Josef Strauss: *Neckerei. Polka Mazurka, op.262*

1869年2月7日の学生舞踏会で初演予定でしたが、この日はヨーゼフの傑作ワルツ〈わが人生は愛と喜び〉 op.263 が初演され、若者たちの喝采が続いたため、繊細なポルカ・マズルカに出番はありませんでした。翌日、造園協会の「花のホール」で初演されました。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈害のないいたずら〉 op.98

Josef Strauss: *Schabernack. Polka schnell, op.98*

1861年の謝肉祭用に作られた楽曲。題名は、シュヴェンダー亭で流行っていた「いたずら」を暗示しています。「知り合いを茶化して遊ぶ」ような類のもの。初演は2月3日。3日後に「シュトラウス兄弟の終わりのない舞踏会」が開かれ、エドゥアルトが指揮者デビューします。三兄弟が次々と指揮台に立つプログラムでも、同曲は評判をとりました。

レオ・ドリーブ：バレエ《シルヴィア》から〈ピチカーティ・ポルカ〉

Clément Philibert Léo Delibes: *“Pizzicati” Polka aus dem Ballett “Sylvia”*

《シルヴィア》は、「フランス・バレエ音楽の父」と呼ばれるドリーブ（1836-91）の作品。1876年6月14日にパリ・オペラ座で初演されました。〈ピチカーティ〉は第3幕のディヴェルティスマンの第1曲。ウィーンでは翌年12月7日に宮廷歌劇場で初上演されました。

ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ〈ディナミーデン〉 op.173

Josef Strauss: *Dynamiden. Walzer, op.173*

副題「秘めたる引力」が示すように、「ディナミーデン」とは「分子や原子などが引き合う力」を指す造語。1865年1月30日の工業舞踏会で初演。急速な工業発展の裏で、目にみえない神秘的なものへの関心が高まりました。リヒャルト・シュトラウスは《ばらの騎士》（1911）のワルツ（第2幕オックス男爵のワルツ）に旋律を借用しています。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈憂いもなく〉 op.271

Josef Strauss: *Ohne Sorgen!. Polka schnell, op.271*

すでに紹介したように、1869年夏にヨハンとヨーゼフの兄弟はそろってパヴロフスクに赴きました。ヨーゼフは体調が優れず、心配の種は尽きませんでした。希望をこめて楽天的な題名の曲を作曲しました。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈カリエール（馬の疾走）〉 op.200

Josef Strauss: *Carrière. Polka schnell, op.200*

ヨーゼフは競馬好きでした。このポルカも馬の歩法から命名されています。「カリエール」とは、ギャロップ（襲歩）よりも速い走り方（疾走）のこと。同曲は、ケーニヒツグレーツで奥軍が普軍に敗退した翌日、1866年7月4日にフォルクスガルテンで初演されました。

* ヨハン・シュトラウス 2 世の作品タイトルについては、日本ヨハン・シュトラウス協会『ヨハン・シュトラウス 2 世作品目録』(2006)に従っています。